



全拾冊曲亭主人編述
 里見八犬傳第八輯
 上帙五冊
 沙之卷廿六下
 丁子屋平兵衛板

特別
 14
 600
 2

二二二



決りぬ日あり神祈り併に誓ひて舞の便且願ませしや夜の夢見人の密に
這越路を魚沼の郡と平元示現心勇まき菅里を潜むや辛く獨這地
まれば由縁の人のあはれ亦定まる宿むる女梅原の形状と変て七目目と見え里人
及旅客も彼此と近つてをゆり由縁計らば這里に喚入れ初め大人と見せし面
年廣志を言まう那世世と一對あり不思議さ青き髪ひか別人たは思ひか
當之現少る豊果もえたりちりちりあやめ大人いふ力投伏せしは没性の事細め折
又心で慮りて後とこれいふ是まの人も那望山あり小野の内に一寸許の菅原又這
大人あまの病中性起言折るれ其首まき念と入れり陳倉の事と元とを這短
刀の良人の紀念事則大村氏より名を宮井と喚れり人不知せ宿望の徳身の事
生りて誦く報まわらざる疑ひをも這御傳の案とせん解まらるれこれ御
縁に仇討の後見とて共信を寛家とまきしゆらふもは意なきやう哀なる水と

五ノ口は信を搦鬼の巧りゆ武藏野にあたる邊水の水形よく不假渡を這ま伏
沈むと次園太のららる有り理とて風色もく顧嘆息またり小文吾呵々と冷笑
ひや翁よ那奴の巧言虚説は感あき実言と聴ゆ他倘宜是亦烈女や良人の為
鯨敵と闘手んと欲するは俺の刃を振止れや本意を遂げぬとも忽地は胆落
怖るるとらんとて投伏せし時及びて必死に極めし不似と賊心言話を頭れ細り
れども這處の陳は此巧るも命の惜むるに彼紫の朱を奪ひ破破の玉を混
まるといふをせむとや俺は一切あらぬとられて次園太を地中曉し外股を鳴し
賢察示誠もあかりあり這奴飽ま捷懲さるりや實を吐くべは術寛かな
嗚なぐぬま捷んと立對入る松岳とち海を渡すは徳まやひりて海難や強顔人の
眼に這て隠脱する疾視を楯の敵と有り身の今ゆもまへるけり折る次園太の角力の第
子小泥海土丈二百堀鯨とを故にな兩個の共仗這里小は既利を松岳の生捕られ

難病の症も亦五分と云ふは然るに其後身石海に城のあり時馬架記那計毒類
せしむけんとの折のよりと年来呼吸の靈玉之口不舎と玉液の奇特より腹
痛不思議。恙有り。由亦神佛の冥助ありん之體より疎る人。亦靈玉の奇特
祈らば昏む暗の氣も扶養もも拂せ。天日之瞻も心懸ぬんと尋思す。速く枕
遣り身と起す。夜も日も肌膚を放さず。身護靈業の切解投け玉と取出つ祈念して
生或米由とく眼色之辨れぬ。鏡を眼内の邪熱退冷。心地清泰あり。り。り。り。
且試み枕邊遠く指したる行燈之符。引きて。蓋揭て。靈亦目覺あり。り。り。り。
荒念と猶未。是則靈玉の靈業特異。疑ひ。信。靈驗灼然。神玉と身付。り。
三十餘日。稽も。地所。茶を。未め。既ひ。る。と。心。大の。抱。揮。思。と。り。り。り。
儼然。欠。と。疎。る。儼。と。怠。慢。と。許。さ。り。と。念。す。亦。復。眼。色。之。辨。れ。物。と。り。り。り。
ら。枕。に。被。微。塵。を。夜。視。も。鮮。明。を。け。い。り。り。り。一。層。を。望。風。以。て。那。荒。廢。堂。の

りて假設婦女と云ふんを折中を船中船虫の如く探定を疑ひ其目水解せり
推量より只官人は侍り身の為人を疑ふ。恒るん鳴呼奈んと胸のこころ心の
のまじも夏の夜も今宵のこ高生憎不明や及又之の鐘响く此雲時睡眠し就けり。
不題詰表大川井井義任り量小大山道常と共宿甲斐州に旅宿す。石木の
御のは直達る指月院に宿投り夜料り。大法師と七峰十一宗照六小面會七昌泰
行徳とあり。大江親兵衛の。す。も。つ。り。長。歡。り。り。り。權。且。逆。留。と。り。り。り。又
道節と商量す。遠代に東北諸州を。巡。り。り。り。又。大。塚。大。飼。大。田。井。生。元
存。之。の。知。り。り。り。親。兵。衛。の。人。を。案。定。り。り。り。大。照。文。小。の。信。々。と。り。り。り。て
説示く。莊。介。去。歲。の。如。く。獨。指。月。院。を。立。ち。武。藏。に。到。り。下。總。に。赴。り。り。り。行。徳。の
里。人。は。大。田。入。子。の。と。同。ひ。り。り。り。扶。御。に。還。ら。り。り。故。小。文。五。無。衛。傳。熟。意。を。會。し。り。り。
る。也。貞。と。共。信。守。安。房。の。親。族。許。趣。り。り。り。の。ま。い。春。也。あり。り。り。世。と。り。り。り。り。

あつたに... 疑念の胸安... 又里人小同... 又五十四郡... 折其真意... 雲舟一月... 十八日月... 鮮明小山... 嶮路... 小山あり... 其首... 故... 佛堂... 元

け... 足... 女... 破... 社... 五... 証... 其... 豊嶋... 郡... 越後... 魚沼... 郡... 三... 大... 宗... 末... 過... ぬ... 憾... 意... 名... 彦... 彦



申堂上中徳へとも離合の時あり有為轉変の世の去住の苦人由は是より信濃は赴く那
里へとも身を過す一と甲斐へなり大山人と香るべしと人びとも去歳の春
如千の州へ巡り来て吉左右衛門大山人は候有り別名甲斐文を名にせられん
せまらと胆白心ひらき思難や惟然とて照る月を雲時眺む折しめれ
持上り人の呻吟く声せらば其介賢良且訝りて肚重ふらや荒言堂舎不夜を
更て天の處を怪しむれ若是家より賊欲去らば快怪山鬼の徳が剛膽と誂え
とく猛可な声と立する人母をあれと尋思をうて徐小裡面を扱入りて打て歩台周遠
るる階子不携りて樓上は降りて月光の下屋より入りて残る隈あり明り
ける小怪し一個の女人の年對ハ四十許百貌の醜くぬり取も駭く繼りて深小扉ら
はありけりさも似ぬとさう壯介賢良と氣色もさう對ひて氣視をすれけり何物ぞ
人ありとて變化する邪元人の小説小見作とてさる赤紅猿見の類ぞとて躬院の邊に

示く慢は俺は戯と似而非魔行ありて烏許なるま又と冷笑へり女人のせと
らるはさるる宜しき神を我妻の妖怪變化はありて這里よりて程遠くぬ小千谷の御
客店小月屋宿仕へりめおれり昌長而良人の方まらり合負賤は兄は富居の幼弟介意を
まてとて人本仕へり口のう身の及まはせし思をうて邪客店へまらり今
茲二月の初旬より小主人の早晩の薄情や賤妻は着想し折を夜談て口説はせ
し侍を辱めり逐逐しとる怒りあり相視小谷里道は粒銀一顆失きとて取喋る
身數金する果は賤妻は襦衣を被せり伴の粒銀を乞糶せりてを理非り合を携り
敵はいひ辭くうとて解りぬ忍和煙主の成光と擢して身動るぬ御婢繩僮
僕輩もさるるけは黄昏の比をて遠荒廢屋敷を年もせり人へ下れぬ構より家
吊りておれりもさるる道不報捷て翌の夜又明後夜の台を思はるる死るる其苦
またまた千隈の河へ推流せんとて出りて半時より三刻ありは信濃に賤妻は竟然非小

奉公の原
官解の原
るるを御
世傳して市
中を仕る取
押を事奉
公といは
安理を取
お尋ね稱
呼あり

告人のもとよ果て官主且今妹を勤りんと酒類二さひ女果納戸よ臥す
既中將自の街直あり節骨の疼む必へ喜まて打へと乾見們よりと吟吟と
あつる掛の他へ近曾備婦よりと見子ひらひらと去歳より這里へ百を
可も亦妻子をれば奉公せんとし儘と小千谷の御る客店へ炊きと遣せし又
中へ東人の後忍情達の遺恨を濡衣を被せと致えとせしハたむべと噓憎む
よの異日御長は告ませんといひんといひの備せとくく暗漫の情と愧えとの
長の語でん管符の後れり快夕餅をせせ準備せとと忌せの恩楓輩の
あつるさんとせと莊介の遠く推禁めとあつる決と無用之春地割董の殿の茂
まて着の終りやわけとよの黄昏小たへく俺們的の涙がど一房の借り睡ん
のと推辭を酒類二強難く小夜深されりやと東西をみるはれも然とあま
ま無造作の尚もとつは餘りの心もろ小勢の石を磨めまらん甲乙上盃盤

引籠て臥房

破碇と洗淨め、壮衣易よとろをせ社介又禁めく否果生来沙量一際之夜の
るれあわねがはし這迄は睡りゆひの喫ゆる酒と浮れて後天を明えよと逆小傳
る官符あるんまの髪を髪とせよとつて酒類二頭を擡て熱まて固く掛ひよと
る月あつるよ任せ倒れおれん急をの藤葉を権且這里に留り古也を遊覽
まの御新物寄の御道に致せと管符と任ん夜りや既深されい就寝のみもよ
下這里の名さゆ雪因るれ蚊之入蠅之掃るれも微雨の比の屋棟裡より夜のみ蚊の
かみさつとあり蚊帳を用ゆる壯衣輩よ南向の八席尻か目算と儲て案内とせ
よと吟吟と両個の支支思あつるゆとすやの処に蚊帳を垂て枕よ臥座よ蒲團よと
より出まつ莊介は誘はる案内を程小莊介酒類二は散びて度刀を小分けり

第七十七回
内命を傳へく由三九二客を招く

風眼と悪く無き者なり。其後掃きく。おれより船虫の假敷をせし
折奴家も捕縛されて石濱の城へ奉り夜艾不測の人の言より那地を脱去りしは此
五卷已前の事なれども折奴家の折奴家を親方より昔はなほ懐かしの懸手果
せ故丈の志を復す。復すと云ふ所の。お身は報ある快く折奴家の折奴家を
情義薄いとせしれん然とて初より。折奴家の折奴家を親方より昔はなほ懐かしの懸手果
つれ。他は肩を振ると久しかり。折奴家の折奴家を親方より昔はなほ懐かしの懸手果
便に。折奴家の折奴家を親方より昔はなほ懐かしの懸手果
ら。折奴家の折奴家を親方より昔はなほ懐かしの懸手果
蓋知る。折奴家の折奴家を親方より昔はなほ懐かしの懸手果

後の夜も鞭責り。折奴家の折奴家を親方より昔はなほ懐かしの懸手果
お身は報ある快く折奴家の折奴家を親方より昔はなほ懐かしの懸手果
つれ。他は肩を振ると久しかり。折奴家の折奴家を親方より昔はなほ懐かしの懸手果
便に。折奴家の折奴家を親方より昔はなほ懐かしの懸手果
ら。折奴家の折奴家を親方より昔はなほ懐かしの懸手果
蓋知る。折奴家の折奴家を親方より昔はなほ懐かしの懸手果

不知守内なる。其の勢、既、其、前後、許、其、敵、之、受、て、利、を、人、も、亦、な、ら、う、あ、る、は、な、か、
臨、ん、ど、所、詮、定、稿、の、退、り、他、の、外、に、折、り、務、に、共、に、小、兵、合、力、に、向、け、り、石、重、の、御、身、
和、ま、し、り、身、も、信、り、那、里、の、門、頭、も、名、告、り、酒、類、之、を、懸、捕、ら、し、主人、大、園、太、四、隣、の、市、人、志、あ、
壯、健、の、走、出、相、援、け、り、衆、賊、之、根、を、斬、り、せ、ん、徳、做、し、た、り、小、文、吾、の、大、厄、を、釋、す、の、功、を、
賊、の、根、を、斬、り、せ、り、地方、の、善、を、除、く、一、呼、ぶ、と、壯、直、衣、を、分、別、既、決、り、決、り、決、り、決、り、
起、り、て、柱、を、根、を、草、鞋、之、取、り、空、を、掃、り、又、兼、座、を、九、尺、の、短、鎗、の、長、官、を、揮、り、取、り、小、
篠、の、口、内、に、現、露、か、早、に、劍、刀、身、装、し、り、縁、頼、り、出、り、一、天、あ、り、程、は、死、竹、數、
駈、ひ、り、衆、賊、之、這、り、里、に、俟、り、り、介、程、は、酒、類、二、鑑、短、衣、手、甲、脚、胄、鉄、打、を、願、卷、小、
刀、を、跨、り、右、に、短、鎗、を、披、り、畧、械、合、し、り、十四、五、名、の、文、書、を、後、に、推、し、先、を、立、り、火、意、隊、配、
大、家、急、げ、と、逸、足、出、り、走、り、跡、を、廿、廿、介、中、鎗、引、花、の、隊、に、紛、れ、共、に、走、り、一、折、り、五、月、の、天、
る、れ、の、驟、雲、を、逐、り、月、を、隱、り、勝、脆、と、呼、随、に、酒、類、二、も、自、餘、の、賊、も、竟、り、壯、今、之、認、び、り、是、火、

家の一人と、此の機念、又、そのもの、り、り、然、而、童、子、簞、子、酒、類、二、石、龜、屋、大、
園、太、の、門、頭、は、こ、や、推、寄、来、り、門、の、戸、烈、く、敲、か、り、主、人、大、園、太、快、出、り、這、里、に、宿、せ、り、
他、の、旅、人、大、田、小、文、吾、は、怒、り、て、復、無、言、の、る、ま、り、の、命、惜、み、小、文、吾、を、索、を、被、り、推、出、せ、
異、議、は、及、公、園、宅、の、女、們、一、人、も、漏、さ、し、斫、盡、し、ん、這、里、刑、也、と、諸、声、を、て、其、の、人、
呼、び、り、間、近、く、臥、さ、奴、婢、輩、車、の、駈、覺、つ、吐、嗟、と、り、怕、れ、り、登、立、時、主、
人、大、園、太、も、覺、り、頓、ち、り、ま、り、且、戸、を、叩、き、問、ふ、り、り、ま、り、の、を、覗、き、り、面、魂、皆、猛、
悪、形、の、解、者、通、て、十六、七、名、短、鎗、竹、槍、脩、刀、を、ひ、り、合、り、り、異、形、の、打、扮、是、緑、林、
錦、旗、の、傳、り、ん、と、又、石、れ、の、原、来、那、假、醫、女、の、同、類、を、め、つ、り、龍、來、り、り、疑、ひ、命、
俺、は、こ、の、大、田、大、人、の、病、眼、を、敵、と、平、何、せん、と、や、背、門、より、落、さん、と、三、思、ひ、り、昔、も、
せ、こ、は、編、り、障、を、旋、り、大、田、が、臥、居、る、を、赴、り、熱、れ、り、四、隣、の、里、人、の、若、も、驚、き、覺、け、り、あ、り、之、賊、
徒、の、多、勢、は、空、に、し、り、り、折、り、入、り、り、授、け、る、もの、を、り、り、既、り、り、外、面、に、酒、類、二、類、り、り、



焦燥して待たず... 逃去る... 相入る... 大川... 矢... 槍... 刀... 賊... 勇... 敵... 推... 五... 矢... 槍... 刀... 賊... 勇... 敵... 推... 五... 矢... 槍... 刀... 賊... 勇... 敵... 推... 五...

起立... 門頭... 草賊... 酒類... 腕... 槍... 矢... 刀... 賊... 勇... 敵... 推... 五... 矢... 槍... 刀... 賊... 勇... 敵... 推... 五... 矢... 槍... 刀... 賊... 勇... 敵... 推... 五...

そ明る鳥衣燈燭多事申あひま主人も教る邊のあかり一夜盗大勢推蒐
まるととま終起出て主人と俱草賊の聊討捕ひたと答る間又次園太も申あひま
聚合て却其介は名告りて若し初ひて流て又いさう是れ由初の大敵や衆賊の夜今
準備のあも加捕死客人の小文者病て皆目えさぬがいつわのせんをばさるは必死の覚
期てはひは山豆りんや大田の大人の病服夜中を盗可く進退自由のさへは死支連の折もく
この地は旅宿多ゆひてさをも賊を滅ゆひり裕と云恰といひ教び壁を破るゆひと人を
其介少更とてその口誼は若く指てる月緊要の一談あり其れ得らば甲夜は徳その
山路る荒廢堂は憩ひ折那船虫より賊婦の深き早糸とてえ出り討ひゆ
其故と詔ひは那取巧は欺だ首様々とのさより其の綱を解断しをさる隨て他宿野へ
送遣しちゆ宿野の故を孤屋や廢毀院の跡は依り且船虫は兄と説りて賊の頭
深き酒顛二と喚做をぬ其初これを知を懸て那里止宿て那當黒の密談を具し渡りて

けれが疑心や氷解して那船虫の當初武藏の阿比谷の奸賊並四郎の幸あり
の并は伴の並四郎の大田生を殺れり這回又船虫は假敷女を打捨てたを復さんとせ
るも漏れを听りて懐る密玉の加護をんか信而賊首酒顛二の這首へ夜敷の
推寄て毒船虫が新舊兩度の怨の時復さんとて説き上既小急之登時
某思ふう不知案内る這所は是賊を殺んと欲せんや他と但し小千谷に到りて
石魚屋の門頭を捕可起し拉り賊首を殺し易かへと尋思て首様を討りて
傷をへまらりて酒顛二も又支當を討捕死今も賊婦船虫の體內より
一個賊と俱に留守しや那首はあり方終酒顛二の殺れりて之を心逃さ下那
奴前後前後度まで草賊と矢蹄をりて毒思を竊盜せると取大田生を宮見とてるも前後
尾と
兩度あはれ信化れ天の人の借は罪人ると走りながら蛇を殺し頭を推む後の思
送るも似し這里より賊巢へハオ早里許る誘ひて天明るんは船虫を

ありありと折へ

とて備へたりしは、又相似たりとて、持て、障風違ひて、心へ、く、遠慮、けれ、
後々、まで、縁、蓋、より、再、會、之、候、人の、と、見、く、用、談、は、百、文、の、目、に、け、り、
日、影、下、暁、より、は、け、り、活、火、は、夜、間、太、く、遠、く、走、り、二、大、士、は、う、ち、
館、より、執、事、の、老、臣、稻、戸、津、備、由、三、大、人、の、使、者、と、り、
雜、兵、十、名、あ、り、從、へ、轡、三、挺、と、り、客、人、達、の、迎、へ、
快、く、准、備、と、志、せ、り、と、二、大、士、は、め、り、又、要、を、
引、け、り、往、來、知、り、
ぬ、る、と、
已、と、
と、
れ、右、の、れ、あ、り、由、元、が、私、の、使、者、の、
領、主、長、尾、殿、の、お、母、君、
御、食、の、

とて奉りしは、猛の准備も、
けれ、人、も、
な、り、明、日、衣、裳、と、
箱、の、蓋、は、
那、老、臣、の、招、待、と、
刀、を、引、
程、の、
より、
一、拾、
穴、八、
跡、
雜、兵、四、五、名、送、
置、
て、



駿と轡子の後、限々かろく程、途々日暮るに、位而社介小文吾の片貝子到
り、時那別館の門前より轡子と立出り引いて、老臣箱戸津衛の宿河を去るに、
津衛の大家の家宰より、床権の定りぬ宅地、いと廣く、程類も、いと老僕
若黨三四名、燭を秉て二大士を玄閑に出迎へ、多然書院へ、玄閑と志けり、看茶の
礼訖、時箱戸津衛由元、萩野井三郎と程へ、出り、二大士と對面し、
功を存せ、武勇と稱へ、且内命の、と、漸く蓋を、程、主文の辨讓言果て、津衛の嘗
歎の爲、と、稱へ、抗も、土畧と、忽地、破と、擲て、寄れ、や、兵們と、喚り、る、声、中、此、下
る、幕の陰より、頭化者、捕り、力士二十名、走鬼ら、後より、組むと、えり、る、其、介、小文吾
を、何れを、渡、爲、は、か、と、檢、扱、を、投、退、々々、要、時、ハ、挑、り、か、も、大、勢、を、爲、め、も、せ、お、衆、の、不
折、り、て、押、へ、急、を、捕、り、畢、竟、津、衛、を、理、不、盡、不、二、大、士、を、綱、を、百、重、情、の、甚、無、名、を、次、の、巻、不、解、分、と、
● 聽、か、し。

里見八犬傳第八輯卷之二終

天保二年卯年
冬十二月十二日稿了

著者仙堂手集

筆福硯壽

大吉刻市